



美女が八人死体が七つ



TOKUMA NOVELS

発行者 徳間康快

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五
電話四三三・六二三一 振替東京四一四四三九二

海渡英祐

美女が八人死体が七つ

Fisuke Kaito © 1978

カバーイラスト／桑原伸之

デザイン／矢島高光

落丁・乱丁はおとりかえいたします

〈編集担当 芦沢孝作〉

早瀬邦彦ずっとこけ探偵録

美女が八人死体が七つ

渡英祐

間書店

TOKUMA NOVELS

美女が八人死体が七つ——目次

第一話	密室のワンちゃん	7
第二話	ネコかぶりのネコ	34
第三話	ピンク・パンティ	2 61
第四話	憎らしい絵本	88
第五話	その嘘ほんと？	114
第六話	ミセス放射能	141
第七話	寝耳にイヤリング	168
第八話	お熱いのはダメ	195
	あとがき	230

第一話 密室のワンちゃん

Ⅰ

「わたしの権利を守っていただきたいんです。それから、わたしの可愛いワンちゃんがなくなっちゃったんですけど……」

法律事務所——弁護士のところへ来た依頼人が、興奮した口調でいきなりこんなことを言い出したら、きみはどう思う？ 前半の文句はまともだけど、後半のせりふを聞いたときには、僕も呆氣に取られちゃった。その依頼人は、法律事務所にはめったに姿をあらわさないような人種だった。欲の皮を突っぱらせて、消

化不良を起したような御面相のおやじでもなければ、蒼い顔をして、眼をつり上げ、脳天へ抜けるようなキンキン声を出すおばちゃんでもない。思わず食べっちまいたくなるような、みずみずしい果物みたいで、ピチピチと生きがよくって、幾何学の本には絶対にのっていないような、複雑微妙な曲線で構成されたしろものなんだ。

ちよっと子供っぽいところのある顔だし、あっさりした水色のワンピースを着ているので、一見女子学生みたいだが、実際はもうちよっと上ではないか、と僕は見た。少くとも体の線は、とても子供っぽいなんてものじゃない。ともかく、可愛らしくてチャーミングな女の子で、しかも、キャンデーに砂糖の衣をかぶせたみたい甘い声を出すんだな。

僕は辛党の方で、汁粉なんか見ただけで身ぶるいするくらいなんだけど、こういう種類の甘さは、何故かぜんぜん苦にならない。それどころか、生唾がこみ上げて来て、思わずよだれが出そうになるのは、いったいどういうわけだろう。

この法律事務所の主で、僕の義兄にあたる岩崎秀雄は、眼をぱちくりさせた。本当は、彼も眼を細めて、よだれをたらしたいところだったかもしれないが、いつも糞まじめな顔をしていないと、弁護士という商売はやっていけない、と思いこんでいるふしがある。それにこの男は、女房、つまり僕の姉の昭子にさっぱり頭が上らないから、ほかの女に色目を使おうとすれば、なみなみならぬ覚悟を要するに違いない。

「ちよっと……ワンちゃんというのは、誰かのニックネームなんですか。それとも、中国人のお知りあいが失踪したとでも……？」

今度は、女の子の方がきよんととして、

「え……？ あら、もちろん、ワンちゃんって、わたしの飼っているスヌーピーのことなんですけど……」
「スヌーピー？ 飼っているというと、動物ですか？ 聞いたことのない動物だが……」

腹の皮がよじれるのを、僕は懸命に押えなければならなかった。義兄みたいな人のために一言説明しておくと、スヌーピーはチャールズ・M・シュルツの人気漫画『ピーナツ』シリーズに登場する犬のことである。猟犬のくせにウサギ狩りはおことり、寝ることと食うことが大好きで、自分を犬と認めることを拒否している風変りな犬だが、いまや日本でも、十代の女の子たちを中心に、一種のブームをまきおこしている。僕の知人にも、スヌーピー狂の娘を持つ男がいるが、彼の話によると、スヌーピーをデザインしたありとあらゆる商品が出まわっていて、それを残らず買い与えていたら、破産しかねないくらいだという。

娘は溜息をついて、

「漫画のスヌーピーを御存じないの？ わたし、スヌーピーのファンなので、自分の飼ってる犬にそういう名前をつけたんですけど……同じビーグル犬で、感じもちよっと似ているものですか……」

「犬？ そのワンちゃんですか……」

義兄が溜息をつき、娘もまた溜息をつき、溜息の二重唱になった。娘の方は、ワンちゃんとかスヌーピーとかいう、ふだんの呼び方がつい口に出ってしまったの

だろうが、義兄がすぐに犬を思い浮かべることができなかったのも、まあ無理はない。弁護士を訪ねて来て、自分の飼犬がいなくなった、と訴えるやつはまずいないだろうから。

「お嬢さん、失礼だけど、何か勘違いをしているんじゃないませんか？」

「あら……あなた、弁護士の方崎先生じゃないんですの？　まだ若いけど、とても優秀な弁護士さんで、ペリィ・メイスンみたいだ、って聞いて伺ったんですけど……」

この分では、腹の皮がよじれすぎて、しまいには破れっちまうんじゃないか、と僕は心配になった。なるほど、義兄は一部では、新進鋭の弁護士などと言われているようだけれども、ただ口が達者なだけで、メイスンみたいな大胆不敵な芸当は絶対にできないし、推理力も至ってお粗末である。もっとも、それでも立派に世間に通用するのだから、彼が自惚れるのも無理はないかもしれないが……。

たったいままで、このイカレ娘が、と言わんばかりの顔をしていた義兄は、たちまち、頬のあたりの筋肉をグニャグニャとゆるめ、しきりに顎をなではじめた。

これは、彼がよくやるポーズで、「我が意を得たり」という意味なのである。

「ま、たしかに僕がその岩崎ですがね……ここへは、どなたかの紹介で？」

「ええ、うちの社長——志村卓蔵さんから。自己紹介が遅れちゃったけど、わたしの名は沢口裕美、志村商事に勤めているんです」

義兄は以前、志村のためにある紛争を有利に解決したことがあり、それ以来、顔の広い志村は、何人もの依頼人を義兄に紹介してくれていたのだった。だから彼としては、ますますこの娘を、あっさり追い払うわけにはいかなかったのである。

「なるほど……ただ、あなたの犬がいなくなったことと、あなたの権利とやらの間には、どんな関係があるんですか？　そもそも、あなたの権利というのは、いったいどういう性質のものなんです？」

「わたしが遺産を貰う権利です。スヌーピーがいなくなっただけで、それがどう結びつくのかは、わたしにはわかりません。でも、よりによって今日、誰かがわたしのワンちゃんを誘拐するなんて、何か関係があるに違いないって気がするんですの」

義兄は眉をひそめた。いくらお世辞を言われても、やっぱり、こんな変てこな問題には首を突っこまない方がよかったかな、と思っっているらしい様子である。

「もう少し順序立てて話してくれないと……要するに、遺産相続に関する問題ですな。被相続人は誰なんですか？　つまり、あなたが相続権を持っているというのは、どなたの遺産についてなんです？」

「わたしの祖父の杉岡健作です。くわしいことは知りませんが、終戦直後に聞いているんですか、何だかすごいボロ儲けをして、そのお金で片っ端から土地を買いまくったとか。その後も、いろんな商売に手を出したり、株をやったりして、ずいぶん儲けたらしいんですけど、ともかく、お金儲けの鬼みたいな人なんです。いまは、事業の第一線からは身を引いていますけど、株や商品相場なんかは、相変らず熱心にやっているみたいですわ」

「なるほど、遺産は相当大的な額に上ると推定されるわけですね……祖父というと、あなたの父方のですか？」

「いいえ、母方です。わたしの母はその一人娘でしたが、父と結婚するとき、ものすごく反対されて、家

をとび出してしまい、実家とは縁が切れたような恰好でした。でも、その後父が亡くなって、母は精神的にも肉体的にもすっかり弱くなってしまい、祖父の方もやっぱりさびしかったのか、結局仲なおりができて、母はわたしを連れて実家へ戻ったんです。その母も、二年ぐらい前に亡くなったんですけど……」

義兄はちらりと腕時計に眼をやって、

「つまり、杉岡健作氏には、いまや子供は一人もいない、孫もあなた一人しかいない、というわけですね。彼の妻、つまりあなたの祖母は御存命ですか？」

「いいえ、もうずっと前に亡くなっていますわ」

「それなら、何も問題が生じる余地はないでしょう。相続権があるのは、直系卑属のあなた一人だけなんだから」

「チョッケイヒゾク？」

「直系の子孫、という意味です……もちろん杉岡氏が遺言書を作成していれば、ほかの人にも遺産が配分される可能性はあります。しかし、この場合も民法の遺留分の規定によって、あなたには全体の二分の一の額が保証されている。遺言書が適正なもので、遺留分の規定に反しない場合は、もっとほしいと言っても、ち

よつと無理でしょう……あなたの相続権というのは、この通り、はっきりしたものです。杉岡氏の死後、不法にもあなたを除外して、遺産が処分されたというわけなのですか？」

「いいえ、祖父はまだ生きていますわ。リューマチの気味があつて、動作は少し不自由ですけど、ほかのところはまだまだしっかりしていて、ちよつとやそつとじゃ死にそうもありません……ただ、祖父は今夜、遺書を作って、その内容を皆に申し渡す、と言っているんです。実は母の死後、わたしも祖父と喧嘩して、家をとび出してしまつて……」

義兄は、もう一度腕時計に眼を走らせた。

「そういう事情があつても、さつき申し上げたあなたの立場に、べつに vari はありませんよ。杉岡氏が遺言書で、あなたを相続人から廃除する意思を表明したとすると、問題は複雑になってきますが、この場合は、廃除の正当な事由があるかどうかを、家庭裁判所で審判することになっています」

「わたし……今夜、遺言書の内容が発表されるときに、信頼できる弁護士さんに立会ってもらいたい、と思つたんです。わたしは、法律のことなんて、何一つ知ら

ないので、どこでごまかされるかわからないでしょう。それで……」

「僕は今夜の飛行機で、九州へ飛ばなければならぬ用があるんです。そろそろ事務所を出ようと思つていたところで、残念ながら、その御希望にはそいかねますね。また、その必要もないでしょう。遺産相続というのは、もちろん被相続人の死亡によつて発生するもので、いま遺言書の内容が発表されても、法律的には何の意味もありません。もし何か問題があれば、改めて相談に乗りましょう」

「でも……」

裕美という娘が口ごもっている間に、義兄はさつきと席を立つた。彼の九州行の話は、たしかに嘘ではない。時間についてはものすごく神経質で、特に乗物を利用する場合は、遅れやしないかと、しよつちゆう氣に病んでいる男だから、さつきから尻がむずむずしていたに違いない。

「あなたのスヌーピーとやらが、遺産相続とどう結びつくのか、まだお聞きしてないけれども、その点については……」

義兄は僕の方に、顎をしゃくつて言った。

「こちらの早瀬邦彦君と話して試みて下さい。彼は僕の義弟で、うちの調査員といった仕事をしています。弁護士ではないけれども、法律の勉強も少しはやっていますからね」

2

義兄の紹介ぶりは、すこぶる面白くなかった。第一に、僕は岩崎法律事務所にとわれていた調査員ではない。義兄と契約を結んで、調査の仕事を引き受けているだけで、僕はあくまでも独立しているつもりだ。もっとも、いまのところ、岩崎法律事務所以外から依頼された仕事はないし、僕には部下は一人もいないのだが……。

第二に、法律の勉強も少しはやった、というのが気に喰わない。亡くなった僕の父は弁護士で、法曹界ぐらい良いものはない、という奇妙な信念を持った男だった。だから、姉の昭子を岩崎とくつつけるのに懸命になったのだし、もちろん一人息子の僕にも、同じ道

を歩むように強く望んでいた。僕自身は、べつに親孝行のつもりはなかったが、ほかに何も取柄がないので、親父にすすめられるまま、大学の法学部へ進み、司法試験を受けようという気になった。

ところが、法律というやつは、どうも僕の性にあわなかった。何しろ、司法試験を受けようと思えば、大げさに言うと、自分の背丈ぐらいの分量の、くそ面白くもない本を何度も読んで、それをおぼえなければならぬのである。僕にはそれだけの根気がないし、そんな努力を払うのは、あんまり意味がないんじゃないか、という気持ちもある。ただ、男がいったん決心したことだし、ふつうのサラリーマンになるのもあまり気が進まなかったもので、ともかく頑張ってはみた。しかし、何度司法試験を受けても、さっぱり受からないのである。

え？ それじゃ、義兄のせりふは事実とほとんど違わないじゃないか、って？ 残念ながらそうだ。だからこそ、僕は面白くないんだ。だいたい、僕が弁護士になれないのは、暗記力にかたよった現在の司法試験制度が悪いせいだ……。

いや、こんなところで妙な気炎を上げてても始まらない

い。義兄のせりふは氣に喰わないけれども、彼が後事を僕に託して行つたのは氣に入つた。沢口裕美みたいな娘の相手をするんなら、僕はいつでもいやとは言わない。

義兄が出て行つて間もなく、その秘書をつとめている矢野文代が帰つて来たので、僕は事務所を退散することにし、裕美を近くの喫茶店に誘つた。矢野女史は仕事の面では有能だが、恐妻家の先生が安心してそばにおいているくらいだから、眺めていて楽しい女性じゃない。オールド・ミスの見本みたいな顔で、眼鏡越しにじろつと睨まれたんじゃ、裕美と話がしにくくてしょうがない。

「うちの法律家の大先生の頭の構造は、いったいどうなっているのか、僕にはさっぱりわからないな。話のいちばん面白そうなところを、聞かないで行っちゃもうんだから……」

幸い、喫茶店はかなり混んでいたので、僕は二人がけの席へ裕美を案内した。彼女をじっくり眺めるには、並んで腰をおろした方がいいに決っている。

それまで、裕美は値ぶみするような眼つきで、僕をじろじろ見つめていたのだが、いまの一言を聞いて、

かすかに口元をほころばせた。まじめくさつた義兄の応対ぶりを思い出して、何となくおかしくなったのかもしれない。事務所にいたときより、ずっとくだけた調子で、彼女は僕に話しかけて来た。

「調査員って、私立探偵みたいな仕事をするんですの？」

「まあ、そういったものだな。スヌーピーと遺産の關係いかん、などという問題は、石頭の大先生より僕の方がずっと適任だよ。さあ本題に入ろうや。まさか、きみのお祖父さんが、きみよりスヌーピーの方を可愛がっていて、そっちに遺産をやろうとしている、というわけじゃないだろう？」

「それどころか、祖父は犬が大嫌いな。何でも、昔犬に噛みつかれたことがあるとかで……わたしが祖父の家をとび出したのも、一つには、そのことがあったからなんです」

「へえ、驚いたな。犬を飼いたいための家出ってわけかい？」

「もちろん、それだけじゃないわ。最大の理由は、わたしが祖父のすすめる結婚話をこたわったことなんだけど……だいたい、祖父はものすごく頑固で我儘で、

何でも自分の思い通りにしないと気がすまないたちなの。こまかなことにまで、いちいち干渉して来て、いっしょに暮していると、息が詰りそうだったわ。それに、犬嫌いというのもちよつと異常なほどで、わたしがスヌーピーの縫いぐるみを可愛がるのさえ気に入らないんです」

「なるほど、そりやたまらんな。きみのお母さんも、結婚問題から家出したという話だったが、親子二代とも、というわけか……きみが問題の犬を飼うようになったのは、お祖父さんの家を出てからなんだね？」

「いいえ、母が亡くなったあと、わたしは犬を飼う決心をしたんです。一つには、さびしさをまぎらすため、もう一つには、祖父に反抗したい気持ちもあったんです。だって、祖父は、自分の思い通りにならないというだけのことで、一人娘の母を長いこと放つたらかしてわたし……仲なおりして、いっしょに住むようになってからも、母はいつも小さくなっていたみたいで……」

裕美は、強く唇を噛みしめた。子供っぽい顔をしているが、この娘はなかなか気の強い面もあるらしい。

「気持はわかるよ……それじゃ、きみは犬といっしょに家出したわけだね？」

「ええ……その、祖父が大嫌いなスヌーピーを、よりによって今日、いま祖父の家にいる誰かが、わざわざわたしのところから盗んで行ったというのは、どういうことかしら」

「何だって？」

「たとえば、遺書を作っているところへ、スヌーピーが飛びこんで行ったら、祖父は血相を変えて怒るに違いないでしょう。そして、犬をけしかけるような悪さをしたのは、もちろん、飼主のわたしの仕業だ思うに決っているわ。そうになると、遺産問題とスヌーピーの誘拐とは、無関係だとは言えなくなるんじゃないかしら」

「待ってくれ……いま祖父の家にいる誰か、ときみは言ったね。犬の誘拐犯人の正体を、きみはどうして知っているんだ？ それに、その誰かというのは……？」

「そもその始まりから、説明しなくちゃいけないわね……先だせんって、祖父から手紙が来て、もし少しでも遺産をあてにする気持ちがあるんなら、一週間だけ自分のところへ来て暮せ、と言って来たの。わたし、よっぽど、遺産なんて欲しくない、って返事をしようかと思っただけど、結局、考えなおしたのよ。わたしが

母のかわりに遺産をもらうのは当然の権利だし、やっぱりお金はないよりある方がいいし」

「そりゃそうだ。で？」

「さっき、岩崎先生が話していた、チョッケイヒゾクとかイリュウブンとか、そんなことわたしはぜんぜん知らないでしょ。だから、祖父のおどしに負けて、オ一ケーしたの」

「お祖父さんが、そんなことを言い出したのは、どういうわけなのかな？ やっぱ、彼もさびしいからだろうか」

「そういう気持もあったでしょうけど……でも、これは一種のテスト期間だったの。祖父は、孫のわたしのほかに、二人の甥をいっしょに呼んでいたのよ。一週間、皆と生活してから、遺書を作ってその内容を発表する、というんですもの」

「へえ……僕には、どうも馬鹿げて聞えるけどな。まるで、下手なドラマの筋書みたいじゃないか。赤の他人相手じゃないんだから、ふだんの態度を見ていれば、何もそんなことをする必要はないだろう。遺産配分のため、という目的をはっきりさせたら、一週間ぐらいなら、誰だって懸命にお祖父さんの御機嫌を取ろうと

するだろう。ぜんぜん意味ないと思うな」

「そこなのよ。皆に御機嫌を取らせることこそ、祖父の狙いだったんだわ。彼は一種のサディストで、周囲の人間に意地悪をしたり、強引に自分の意志を押しつけたりするのが、何よりも楽しいらしいの。皆が自分をおそれうやまうように仕向けて、暴君の気分を満喫したかったのよ。それも、さびしいという気持から出たことには違いないかもしれないけど、祖父の場合は、ものすごくひねくれた形になってしまっただわ」

「なるほど。たしかに、そういうタイプの人間がいることは事実だな」

「遺書の内容を発表する、というのも、同じ心理からだと思うわ。今後の情勢しだいで、遺書を書きかえることもあるぞ、って釘をさしておけば、皆にひきつづき圧力をかけておくことができるわけでしょう……祖父はふだん、堀田利夫という秘書の人と、森ウメという古くからいるお手伝いのばあやさんの二人を相手にしているだけなので、暴君ぶりが思うように発揮できなくて、欲求不満になっているんだわ。どんなにいい給料を出しても、この節、人を新しくやとるのは大変